

欲望のエネルギー論

(その5)

黒 石 晋

9. 商人機械(1) —— 貨幣のマクロ構造 ——

かりに神が存在するにしたところで、別にどうということはない。 —— ジャン・ポール・サルトル

市場理論の標準モデル(一般均衡理論)に、理論上、貨幣が登場しないことは良く知られているし、すでに少々触れた。それは、ひとつには、このモデルが〈閉鎖系の平衡理論〉になっているからであり、この均衡状態には売り手市場も買い手市場もないからであった。だが現実の経済はもちろん、到底そのようなものではない。

一方、塩沢由典が指摘するように、市場理論には〈貨幣〉の他に〈商人〉も姿を表さない¹⁾。市場理論では、合理的な経済主体の全知全能が前提とされ、彼らは所望する財の所在を瞬時に把握・判断でき、したがって交換のために時間もコストも要しないと虚構されている。市場理論には大規模な、しかも個別な、需給の対面交換があるだけなのであり、それゆえそもそも商人の存在する理論的余地がないのだ。だが現実の経済はもちろん、到底そのようなものではない。

すでに示唆してきたように、実際には、貨幣経済は商人経済であり、商人経済は貨幣経済である。そしてそれは、システムが作動してゆく〈過程〉としてのみ存在する。してみると市場均衡の理論に貨幣と商人がともに存在しないの

1) 塩沢由典『市場の秩序学』筑摩書房、第2章。

は決して偶然ではなく、実は動的〈過程〉に重きを置かず（過程が永続する、などとはよもや考えない）、不動の〈結果〉のみを希求する、という同一の理論的抽象の手続きが帰結する必然といえよう。そうなるのは、市場理論が理論化のための便宜を優先するあまり現実の経済を強引に抽象していることによる。

では、貨幣、およびそれをめぐって商人たちが編制する社会機械の実体とはいかなるものか。われわれはすでに、欲求にもとづく〈閉鎖系の平衡理論〉を捨て、社会への欲望エネルギーの不断の備給に着目した〈開放系の非平衡理論〉を目指す決意をした。これについて考察する手はじめとして、以下、上記のような〈閉鎖系の平衡理論〉の論理構成について批判的に再検討し、それを逆手にとって、非平衡の商人経済の特徴を浮き彫りにしていこう。

I 商人経済の特質

商人とは誰のことか

商人とは、商品を扱う人のことである。ここでいう商品とは、前号で見たように、貨幣と引換えにその所有権を移転する財のことであるから、商人とは貨幣を扱う人のことでもある。当然ながら貨幣と商品とはつねに反対方向へ動く関係にあるわけで、したがって商人は、社会-経済システムにおいて貨幣と商品とを反対方向に流す働きを担当する人のことなのである。

商人はまた、未分化な欲望に対し、貨幣と引換えに具体的快樂（商品）を備給することで、人々の欲望を実現する**欲望の代理人**でもある。その過程で商人は、自分の持つ具体的商品を他人からの未分化な貨幣に換え、それをを用いて自らの欲望をも実現する。この意味では、商人は他人の欲望によって養われる被扶養者であり、いわば社会への**パラサイト**である。だが彼らはまた、その代償として、社会の新しい道を開拓する**アントルプレヌール**であり、また人々の欲望を煽る**アジテーター**であり、かつ時として人々から欲望エネルギーを搾取する**主人**に成り上がる。

商人は社会においてかくも多機能であって、まさに光と闇の両面を備えている。ここにいう「光と闇の両面性を併せ持つ」という属性、これは本稿ですで

に頻繁に現れている。それは、そもそも〈貨幣〉や〈欲望〉の属性なのであり、またひいてはエネルギー一般の属性だったのである。エネルギーにおいては、秩序と破壊、創造と破滅——光と闇——とが紙一重だからである。したがって洋の東西を問わず、歴史上、商人はしばしば「卑しい職業」とされる傾向があった。江戸時代の士農工商しかり、西洋におけるユダヤ商人の処遇しかりである。このような現象は、社会から見て商人が「有用」・「必要」でありながらも、他方で非常に「危険」・「有害」である、という「両面性」に由来するのであり、それは商人が人々の〈欲望〉を代弁する活動者だからこそ、生じることなのである。

商人機械における欲望の調整

ともあれ、文頭に述べたように、商人とは欲望の代理人であり、総じて**社会の欲望を開拓し、欲望と欲望との間に新しい、新奇な〈接続 connexion〉を見出し、これを互いにつなぎ合わせることを使命としている人々のことだ**、ということができよう。この活動によって、商人は社会の中に新たな関係を紡ぎ、付加して、それが全体として社会構造を築きあげていくことになる。

このようにして商人と商人とが結合し、成立する異方的な構造、方向性を持った構造を、本稿では〈商人機械〉と呼んだのだった。それは同時に、貨幣の〈分子機械〉であり、欲望のエネルギーを用いて作動する〈欲望機械〉でもある。商人はつまり、社会の中で〈キューリーの法則〉を実現する役割を担った存在なのである。

マクスウェルの魔

上記の論点をもう少し論理的に掘り下げておこう。そのために、やや遠回りとなるが、まず熱・統計力学系における〈エネルギー／エントロピー〉と〈情報処理〉との関係を理解しておく必要がある。本論考は基本的に「エネルギー論」であるからだ。

熱・統計力学系におけるエネルギー／エントロピーと情報処理との関係を典

型的に示している有名な事例が、〈マクスウェルの^{デモン}魔〉のパラドクスである。以下に、この逆説の概要を示しておく。

*

(a) 電磁気学の分野でよく知られるスコットランド系の物理学者マクスウェル (James C. Maxwell) は、熱・統計力学でもいくつかの重要な貢献をおこなっているが、なかでも有名なもののひとつが「マクスウェルの^{デモン}魔」と呼ばれる思考実験である。この思考実験は、当初エントロピー増大則へのパラドクスとして知られたもので、その骨子は次のようなものである。

きわめて小さな扉のある壁によって隔てられたふたつの部屋A・Bを考える。この2つの部屋は、初期条件において同じ温度とする。次に、このふたつの部屋をつなぐ扉を開閉する仮想的な門番として^{デモン}魔物を想定する。扉は非常に小さく軽いので、その開閉にはエネルギーをほとんど消費しない。またこの魔物は、部屋の空気の分子を個々に識別できるものとする。それぞれの部屋の内部で空気の分子はランダムな運動をしているわけだが、この魔物は、Bの部屋の側では、扉に向かってくる空気分子のうち速度の大きなものは瞬時に扉を開いてAへ入れ、速度の小さなものに対しては扉を閉じてBに残す。逆にAの側では、同じく扉に向かってくる空気分子のうち、速度の大きなものに対しては扉を閉じてAに残し、速度の小さなものは扉を開いてBへ通す。魔物がこの仕事を繰り返すとどうなるか？——容易に想像できるように、やがてAの温度は上がり、Bの温度は下がるはずだ。結果、もともと均等だったふたつの部屋に温度差が生じ、かつその温度差が増大していくことになる。しかもこのふたつの部屋は、その外部に対して孤立系であり、その意味で閉鎖系である。この事実、閉鎖系においてエントロピーは増大する、という熱力学第2法則に反する。

以上が「マクスウェルの魔」と呼ばれるパラドクスである。この結論は、簡単な思考実験で「エントロピー増大則」の破綻を予言するものだったため、おおいに世の関心と呼ぶこととなった。

*

(b) マクスウェルの魔のパラドクスを解く鍵は、ハンガリー系の物理学者レオ・シラルド (Leo Szilárd) によって与えられた。彼は、魔物の行動の本質は情報処理にある、と考えた。ここでは個別分子の状態を識別し選別する、という営みが情報処理なのであり、これだけで系のエントロピー値を変化させることができる。つまりシラルドは、エネルギー論的〈エントロピー〉現象が実は情報論的〈選択〉と同じであることを示したのである。逆にいえば、エントロピー増大とは、当該系がマイクロ挙動の選別という情報処理の営みを放棄したときにたどる過程なのだといえる。この知見は、シャノンによる情報量のエントロピー表現と直接論理的に結びつくものである。

なおこの場合、魔物による認知の範囲は、扉の周囲の局所的なものであってよい。部屋全体の分子の挙動の認識を要する、といった非現実的な全知全能性を仮定する必要はないのである。また、魔物が処理すべき情報量は「開／閉」の1 bit だけであり、しかもその判断には多少の誤りが混じってもよい。すなわち、魔物に要請される条件は、①極小の認知能力と ②極小の情報処理能力——極小の計測と極小の制御——だけである。このような条件はきわめて緩やかで自然なものであり、行為主体に全知全能を仮定する非現実的な理論構築の対極にあるものといえるだろう。かかる行為者を、本稿では仮に〈極小主体 minimal agent〉と呼んでおく²⁾。

上述の知見に加え、シラルドが指摘した重要な結論は次のことである。魔物は分子を識別する際、何らかのエネルギー手段（光を当てて観測する、など）をとらねばならない。だがそのエネルギー源は系の中に存在しない。つまり分子識別のために必要なエネルギーを外部から供給しなければ、魔物は分子を識

2) 繰り返しになるが、〈マクスウェルの魔〉の活動に全知全能の仮定は必要ない。「魔」は極小の認知と極小の情報処理だけでシステムの秩序形成に大きな力を発揮するのだ。このような〈極小主体〉は、それを想定するに十分な現実性と論理的意義を有するというべきである。これに対し、世界のすべての質点の位置と速度を把握し、力学法則にもとづく計算を行うことで世界を未来永劫まで予言する仮想的な全知全能の知性は〈ラプラスの魔〉と呼ばれている。新古典派経済学の市場均衡理論は、経済主体にこのような知性を要求しているのであるが、これこそ非現実的というべきである。

別できない。いやそもそも、外部エネルギーを前提しなければ魔物自身が生物として存在しえないのである。こうしてマクスウェルの魔は、一見閉鎖系に見えても、実は開放系だったのであり、閉鎖系では起こりえない現象だったことが示されたわけである。したがって閉鎖系における「エントロピー増大則」は破れていない。さきに「エントロピー増大とは、当該系がマイクロ挙動の選別という情報処理の営みを放棄したときにたどる過程なのだ」と述べたが、閉鎖系は、どうしても情報処理の営みを放棄せざるをえないわけだ。閉鎖系では、みずからの情報処理をみずからがおこなうことはできないのである。

このことはしかし、逆にいえば、系の外部から適度なエネルギーの供給があれば、つまり開放系であれば、うまく調整することによって当該系は非平衡の異方的状態を必ず実現できる、ということでもあるわけである。

*

(c) なお、シラルドのアイデアを精緻化し、数理的な考察を進めたのがフランスの物理学者レオン・ブリルアン (Leon Brillouin; ブリュアンと発音するのが正しい) であった。したがって今日、〈マクスウェルの魔〉は時折〈マクスウェル=シラルド=ブリルアンの魔〉とも呼ばれている。

*

マクスウェルの魔がおこなっていることは、かいつまんでいえば、熱・統計力学系においてエネルギーを担っているマイクロ分子を一定の基準のもとに選別・分別し、これによってエネルギーが無方向の等方的分布へと拡散するのを防ぎ、結果として当該の熱・統計力学系に方向性のあるマクロのエネルギー分布をつくりだすこと—— エントロピーを下げること——、である。この働きによって、当該の熱・統計力学系は、全体として何らかのマクロ「仕事」をおこなうマクロ「力」を得ることができる。

もちろん、シラルドやブリルアンが指摘したように、マイクロ分子を識別・選別する際の情報処理にそもそもエネルギーの消費が不可避である。したがってマクスウェルの魔はエネルギー論的閉鎖系には存在しえない。だが逆に見れば、系が開放系であれば、うまくやれば、必ずマクロの方向性をもつ構造を実現で

きる、ということでもある。

商人はマクスウェルの魔である

以上の関係を社会—経済システムにあてはめて考えてみよう。個々の人間主体に含まれる〈欲望〉のもとでは、社会—経済システムはエネルギーが不断に備給・散逸するエネルギー論的開放系となる。そして商人とは、かれら自身欲望のエネルギーを消費しながら貨幣（欲望エネルギー媒体）の流れを選別し、それによって欲望エネルギーの社会的分布が無方向性のものになるのを防止する存在である。ここに、社会—経済システムにおいて〈貨幣〉は「エネルギーを担うマイクロ分子」に、また〈商人〉はそれを選別する「マクスウェルの魔」に、それぞれ相当していることが理解されよう。商人の活動は言葉の厳密な意味での〈能動輸送 active transport〉である。

かくて商人こそ、社会の方向性（社会機械）を成立させ、それが崩壊しないように維持する存在、すなわち〈キューリーの法則〉を実現し維持する役割を担った存在——社会—経済システムにおける〈マクスウェルの魔〉——なのである。そしてこう考えるとき、社会—経済システムにおける商人の活動の本質は情報処理である、と極言できる。この働きによってこそ、社会が方向性を持ったマクロの力を——社会秩序や社会発展を——発揮しうるのである。

商人のはたらきとその意義

上述したように、社会—経済系の中で商人が担っている第一義的に重要な営みは、貨幣の流れを方向づける情報処理をおこなうことであり、それによって、社会に方向性のあるマクロ構造（社会の分子機械）を形成し・維持することである。このマクロ構造を〈商人機械〉と呼ぶのである。

商人は、この過程で、貨幣を社会空間にまんべんなく等方的に分布させるのではない。時に、あるところへ集中的に投下する。それは結果としてきわめてアンフェアな営みとなるが、これこそ、マクスウェルの魔が行っていた情報選別の働きにほかならないのである。しかしむろん、それは確信をもって行われるの

ではない。欲望の行為は、不安な行為だからである。

商人の活動と社会の活性

以上のことから、次のことがいえるだろう。

商人たちが活発に活動し新しい販路を開いて欲望と欲望を接続させつつある状態・新たな商人機械が形成されつつある状態は、社会が若く成長している状態、健全な状態といってよかろう。商人は、本来的に一箇所へ永住し安定均衡を指向する定住民ではない。彼らはむしろ定着せずあちこちへ動き回る遊牧民たることを宿命づけられているのだ。かつての商人は隊商を組んで内陸を往来し、あるいは大航海時代には七つの海を股にかけた。現代日本の商社マンもあらゆる交通手段を駆使して世界中を飛び回っている。商人とは本来そういう存在で、こうしてあらゆる欲望を開拓し接続するのが彼らの使命なのだ。

とすれば逆に商人たちが既得権の墨守のみに墮しているような社会は、社会が老化し発展の可能性を失っている状態といえよう。このような社会は、環境の不慮の変化に付いてゆけず淘汰される恐れがある。

そして彼らがない社会は——それこそ、需給が直接に〈接触〉を模索し、対面交換せねばならない原始的な社会ということができよう。まして、欲望が想定されず欲求の閉鎖系が前提とされるなら、そこでは社会の分子機械は衰退に向かい、これにともなって自動的に貨幣も不要となり消滅するはずだ。そのような社会とはいかなるもので、どこに存在しているか。これを次の節では、市場均衡の世界と社会主義計画の基本発想の中に探ってみることとしよう。それを考察することで、商人経済の対照例を把握し、ひるがえって商人経済の特質について理解を得ようというわけである。

II 商人のいない世界

市場経済と商人経済の理念的対比

純粹に理念的にいうと、市場経済と商人経済との形式的関係は、すでに述べ

できたことから、次のように対比分類することができるだろう。

市場経済 —— 均質で無構造の抽象空間。無貨幣の対面交換〈接触〉。

商人経済 —— 方向性を持った複雑な販路網。貨幣を媒介とする〈接続〉。

理念型としての市場経済で想定されるのは、多数の経済主体が互いに一過性の接触・交換・分離を繰り返す、無構造の等方的な（対称的な）抽象空間である。そこには商人の存在が想定されていない。だが現実の経済システムは異方的な（非対称の）商人経済であり、そこでは方向性を持つ販路によって持続性の〈接続〉が行われている。この持続性の構造こそ、塩沢由典のいう〈見える手〉であり、ドゥルーズ＝ガタリのいう〈根茎^{リゾーム}〉であり、また〈キューリーの法則〉でいう〈非対称〉である。

このように、市場経済と商人経済の両者は論理形式上、基本的に異なるものである。にもかかわらず、市場均衡の理論は、この複雑な商人システムを、無自覚なままに、均質でノッペリとした等方的な単純システムとして粗雑に近似し、それで済ませようとしているのである。複雑な非線形現象を、そのままの形では解けないというだけの理由で線形近似し、それで済ませよう、というのに近い、といったらよかろうか。

この近似は、むろん、一概に誤りだとはいえない。認識目的によっては有効な面も含んでいる。ただ、あまりにも単純だといいたいのである。たとえば、商人経済の複雑な販路網は、これまたきわめて複雑な神経細胞の複雑な有方向の〈接続〉からなる脳にたとえられよう。脳はあまりにも複雑なので、神経細胞の一つ一つの接続を解明するのは至難である（絶望的ですらある）。だが、だからといって、この脳をまず生体から取り出し、さらにミキサーにかけてバラバラな無構造状態にし、得られた有機物の均等溶液（モル＝平衡）で近似したとして、それで済まされるであろうか。もちろん、この均等溶液を分析して、タンパク質〇％、脂質〇％、…、と明らかにすれば、真理の一端を表現するものにはなる。だが、「この均等溶液が脳だ」とは到底いえない。脳はもっと「複

雑なもの」であり、生体内の生きた状態で（非平衡ということ）、その構造・機能を明らかにしなければ不十分だからである。

市場経済と商人経済との関係も、これに似ている。無構造の市場がきわめて大雑把な形で真理の一端を表現していることを否定するものではないが、それはあくまで「一端」にすぎず、それだけではあまりにも単純というほかない。ここでは、困難ではあるが、このような安易な「単純思考」の誘惑を振り切り、モランのいう「複雑思考」(la pensée complexe) の精神を実践してみることにしよう。³⁾

以上のように対比把握した上で、以下では市場経済と商人経済、両者の理論形式上の比較を通じて複雑な経済システムの実像に迫っていこう。

社会主義の特性

一方、同じく商人の存在しない経済システムとして、社会主義計画の経済についても同時並行して考察していこう。

第3節(『彦根論叢』第306号, p.133) で我々はすでに、社会主義経済が失敗したのは、欲望を開拓しそのエネルギーを社会の発展に供する仕組みを持たなかったからである、と述べておいた。ただしその際には、この「仕組み」が具体的に何なのかという点にまでは踏み込んでいなかった。だが今や次のように言える：—— **その仕組みとは、商人のことであり、商人機械のことであり、**と。社会主義国には、そもそも、上記のような意味での商人がいなかったのだ。⁴⁾ 20世紀型社会主義の社会主義たる所以は、社会から資本家を追放することであ

3) エドガール・モラン『複雑性とはなにか』国文社、1993年。

4) もちろん社会主義国にも小売店があり売り子がいいて、物流機構が存在したが、その事実がここでいう商人の存在を意味しないことはいうまでもない。彼らには戦略的意思決定(選択、開拓)の余地がなかったからである。したがってそれらは単に配給窓口であり、配給係員であり、配給機構にすぎなかった。また、貨幣が存在し、貨幣を介した商品交換がなされているようにみえたが、それは実際には配給切符にすぎなかったし、伝がなければ十分に機能しなかった(盛田常夫『体制転換の経済学』新世社)。このように一見資本主義体制と類似した組織・媒体の存在したことが社会主義の悲劇といえる。どこに問題があるのか、隠蔽されてしまうからだ。

った。つまり社会主義は、個人・法人がまとまった資金を保有しその投下先をみずから戦略的に開拓すること（資本家となること、商品化すること）を禁止し——つまり販路の自己開拓を禁止し——、かかる資源配分の権限を国家独占とした。これはつまり、商人を禁止したということであり、それに尽きるのである。

このように商人を禁止した経済システムが、いかなる運命を辿るか。この点を社会主義の歴史に即して考えることは、市場均衡の理論が単に机上のモデルに終始するのに対し、実際に歴史的事例として検証できる点で研究素材として優れた事例なのである。そして社会主義体制は、商人に代わって資源の分配権限を中央に集中独占し、中央の計画によって分配を実施する、という道を選んだのだが、その際の計画の理論的裏付けがどういうものだったのかを市場均衡理論との関連で考察すると、非常に面白い結果となる。

古典的・単純思考の限界

社会主義が商人を敵視して排除し、そして失敗したという事実には、市場理論との関連で、非常に面白い教訓を読み取ることができる。つまり皮肉にも社会主義は、少なくとも結果を見る限り、**商人を排除する市場均衡の理論を信じ、理論通り忠実に実践し、そして失敗した**、ということを含意しているのだ。それは、市場均衡の理論も社会主義計画の理論も、ともに（神の）予定調和を信奉する“古典的”思考——系を閉鎖系とみなし、その結果どこかに最適解があるはずだと信奉する思考——に立脚しその呪縛から逃れられない同じ穴の貉であるからだ。つまり、社会主義を斬り捨てるのなら、返す刀で市場均衡の理論とも対決しなければならない。

均衡理論と社会主義計画はどこが違うか？

この論点をもう少し掘り下げてみよう。かつてミーゼスやハイエク、ランゲらによってなされた、社会主義計画の可否に関する論争はよく知られているが、この論争は、今日となっては奇妙なことに、市場経済も社会主義経済も理論的

に大差がない、という結論に至っている(森鳴通夫⁵⁾)。社会主義計画の理論(物財バランス法)も、その形式をつきつめてみれば、結局は需給の均衡を目指すものとして**市場均衡の理論と形式上同一物になってしまうのである**。たとえばレオンチェフの投入産出分析は社会主義計画の手法と事実上同じものだ。また、ミーゼスによって「価格を失った経済には最適化計画の根拠がない」と批判されたランゲは、こともあろうに、価格をパラメータとして導入すれば計画は可能だと反論した。そして問題の価格は、連立方程式の最大化計算によって求められるということになった。これによって、社会主義計画においても最適配分がなされる、というのである。

だがそうになると、社会主義計画と市場機構とではいったいどこが違うのか?——この疑問は誰しもが抱くところであろう。結局、こういったやりとりの結果、両者の間で僅かに異なっているのは、社会主義計画が中央に集中して行っていた均衡の計算を、市場機構は分散的に行っている、という**計算機構の違いにすぎない**ことが確認されるに至ったのである。実際、**純粋理論面だけをみれば**、この結論は正しい。ただ**実践上**、現実の経済系が複雑すぎて中央集中方式では計算が解けないという欠陥が社会主義の側にあった——もちろんこれはシステムを**現実**に**運営**する上で致命的な欠陥だったのだが——だけだというのである。

市場均衡理論への疑問

実践上はともかくとして、このように理論の根幹が同一物だということが露呈してしまうと、社会主義の失敗を眼のあたりにした市場均衡の理論も、実は安穩としてはいられないはずである。

それは、なるほど均衡解(“見えざる手”)の存在を特定条件のもとに「証明」はしたかもしれない。が、現実の経済に即してそれを解いて見せたことは一度もなかった(複雑すぎて、社会主義計画と同じ意味で解けるはずがない)のだ。

5) 森鳴通夫『思想としての近代経済学』岩波書店、1994年。

これでは空論と言われても致し方なからう。その意味では計画に迫られてともかく解こうとした社会主義の方が理論に対して誠実だったといえるのである。もっと辛辣に言えば、一般均衡理論が生きのびているとすれば、それは、自身にもとづいて現実の経済システムを運営せよという使命を負わなかったために責任追及の眼から逃げおおせているという狡猾の産物にはかならない。両者は出自のみならず才能・知性までも同じくする一卵性双生児であり、その後になどった人生が明暗を分けたにすぎないのである。

繰り返していうと、両者が究極のところでは同じものになってしまうのは、社会主義計画の理論も市場均衡の理論も同じ古典的思考（均衡＝平衡の予定調和的思考、単純思考）の上に立脚しているからにはかならない。いずれも、商人によるいかなる努力も結局すべて無駄で、どうあがいても必ず均衡解へ連れていかれるはずだと信じられているのだ。かようにシステムの予定調和が信じ込まれてしまっただけでは、これをかき乱す商人の力が認められないのも当然といえよう。それは理論的に不都合なものとして排除されねばならなかったのである。

商人のいない世界

だが現実の社会では、商人は、そもそも社会—経済システムが均衡＝平衡へ向かう力に逆らおうとする〈マクスウェルの魔^{デモン}〉である。〈マクスウェルの魔^{デモン}〉とは、マイクロ要素の情報選別を繰り返し行うことによってエントロピーの増大に抵抗するメカニズムのことである。

かかる〈マクスウェルの魔^{デモン}〉、すなわち商人のいない世界を実現した社会主義国こそが、実は、欲望の抑圧のもとに、正確に、均衡理論の予言する閉鎖系の均衡＝平衡に向かっていたのである。すなわち、社会—経済的“死”の世界に。

III 資本主義の活動

資本主義は単なる市場均衡の経済ではない

だが現実には存在する資本主義の運動は、単なる市場均衡の経済ではなく、も

っと“したたかなもの”であったのだ。このことを自覚するには、まずこう問うてみよう：—— 百歩譲って、かりに資本主義が分散的計算機構だとして、いったい誰がそれを実行していたのか —— と。それが均衡論を信奉する理論経済学者でなかったことはまず明白である。理論上は、その計算および計算のための情報収集は、全知全能と仮定される個々の経済主体が実行したことになる。しかし社会主義の計画当局が全知全能でありえなかったように、経済主体もまた全知全能ではありえない。したがってこの仮定には説得力が乏しい。

その現実の世界に即した解答はこうである：—— それは商人であり、彼らの努力であり、彼らによる試行錯誤である —— と。彼らが時に成功し、時に失敗し・自らを犠牲にしながら、経済のシステムを運営してきたのだ。しかも彼らが身をもって実践した解が、市場均衡理論のいう均衡解と同じものであったかどうかは、実は甚だ疑わしい。エネルギー収支を伴う開放定常系においては、安定均衡解とは異なる非平衡定常解（あるいは定常の存在しないカオス・アトラクタ）の方が一般的なのであるが、均衡理論にはそれを証明する手だてが理論的に存在しないのである。

ともあれ、資本主義は、市場均衡の理論がというような“死の”物理的平衡＝均衡の経済ではなく、非平衡の“生きた”商人経済だったのである。これが現実とすれば、生きた商人たちの活動を理論的に排除している市場均衡の理論は、分散的計算機構をも排除する空論と言わねばならない。

ここまでは「百歩譲って」の議論だったが、実際には、商人こそが、社会の欲望を後ろ盾に、事前の計画・計算からは予測しえないことをやってのける。その意味で商人経済のシステムこそ、予測不能の複雑系である。商人システムこそが、社会－経済系のマクロな発展の力を生み出すのだ。社会主義の失敗は、資本主義に内包されるこの商人の力を認識し取り込むことができなかったことによるのであり、それは同時に、商人を認めえない市場均衡の理論が実験的に失敗したことをも意味しているといつてよい。少なくとも、市場均衡の理論のみを資本主義の中心パラダイムに据えることはもはやできないことが実験的に証明されたのである。⁶⁾

ブローデルにおける「経済」と「資本主義」

繰り返して言う、資本主義の運動は、単なる市場均衡の経済ではなく、もっとしたたかなものである。このことについて、今ひとつの研究事例を挙げておこう。フランスの「アナル派」史学の泰斗、フェルナン・ブローデルの考察である。彼が大著『物質文明・経済・資本主義：15～18世紀』(*civilisation matérielle, économie et capitalisme, XV^e - XVIII^e siècle*, 1979)を構想したとき、念頭に置いていたのは、けだし、このことであった。

この著作においてブローデルが「経済」(市場機構)と「資本主義」とを区分把握していたことは書名にも示唆されているが、彼は人間社会の長期にわたる歴史的な動きを、物質生活・経済生活・資本主義活動という3つの異なる階層でそれぞれ捉えようとした。こうしたとき彼にとって、資本主義とは経済現象ではなかったのである。もっとも、この表現には誤解のないよう補足が必要だろう。ブローデルのいう「資本主義」とは、経済を基底としながらも、経済現象そのものにとどまらぬ、その上層に築かれた構築物として構想されているのだ。彼は言っている：

…私が始終気付いたのは、通常のそしてしばしば慣習的な(18世紀では、自然のと呼ばれたであろう)交換経済と、より上位の、精緻をきわめた(18世紀では、人工的と呼ばれたであろう)経済との絶えざる対立であった。私は、この区分が明白に触知できるものであり、これらの相異なる階の間では、活動の担い手と人間・行動様式・心性が明らかに同じではないと信じている。また市場経済の諸法則は、ある水準にお

6) 「実験」とは、そもそも研究対象のパラメータを人為的に制御することによって、当該仮説に含まれる因果の一意的な対応を確認する手続きである。とすると、もし経済理論を実験的に検証しようと思えば、人為的に統制経済を作ってみるしかないわけだ。そして、当該の制御のもとで、事前に計算された均衡点へと経済系が収斂することを実証しなければならぬのである。だがこれはまさしく社会主義が市場理論に即して試みたことではないか?—— こう考えれば、社会主義は、市場均衡の理論を含めた古典理論全般に対するきわめて壮大なしかも貴重な実験であったと認識しうる。社会主義は、3億人もの(あるいは見方によっては15億人もの)人々を被験者とし、50年あまりの年月を費やし、かつ被験者にはそれが実験であることを知らせずに行われた、大規模で本格的な社会実験であった。しかもその実験結果は、理論に対して明確に「否」であった。社会科学者はこの壮大な実験から謙虚に多くを学ばねばならない。

いては古典経済学が記述するのとりの姿で現われるが、より高度の領域・計算と投機の領域においては、自由競争というその特徴的な形態が見られるのがはるかに稀であることも。影の部分、逆光の部分、秘義に通じた者の活動の領域がそこから始まるのであり、私は、それが資本主義という語によって理解しうものの根底にあるのだと信じている。そして資本主義とは、(交換の基礎を、たがいに求めあう需要におくのと同程度あるいはそれ以上に、力関係におく) 権力の蓄積であり、避けられぬものか否かは別にして、他に多くあると同様な一つの社会的寄生物なのである。一言でいえば、商業世界の階層ヒエラルキーというものが存在するのである。すべての階層ヒエラルキーにおいてと同様に、上部の階は、それが乗る下部の階がなければ存在しえないのも事実であるが。最後に、交換の直下に、よりよい表現がないため私が「物質生活」と呼んだものが、…すべてのうちでもっとも部厚い層をなしていたことを忘れないでおこう。

(「交換のはたらき」 pp. 2-3)

経済現象は市場の自己調節メカニズムがその中心をなしているが、ブローデルにとって資本主義とは、この市場メカニズムを前提としつつ、その上に成立する、力と力とのぶつかりあいの中に生成するダイナミックなシステムのことである。だからそれは、市場機構そのものと同じではありえぬ、別物である。そして彼によれば、その構築物の中心をなしているのが「商業世界」であり、その担い手としての「商人」なのである。

筆者としては、ブローデルの構想した、この「経済」(市場機構)の階層が本論考でいう〈市場経済〉に、また「資本主義」の階層が本論考でいう〈商人経済〉⁷⁾に、それぞれ相当する、と考えたいのである。

7) 資本主義という運動体の根幹を商業活動に置く、この考え方は、“正統”マルクス主義を標榜する論者たちからは忌み嫌われてきた伝統がある。それは“正統”マルクス主義が「流通」よりも「生産様式」にウェイトを置いて社会体制を理解しようとしてきたという因襲の所産だと思われる。たとえば1950年代の有名な「ドップ＝スィージー論争」を想起してみるとよい。“正統”とされたドップは何よりも資本主義を「生産様式」として捉えることに固執し、流通の力を強調したスィージーと対立したのである(『封建制から資本主義への移行』 柘植書房、1981年)。なおスィージーの立場は今日のブローデルやウォーラスティンの立場に近いといえ、筆者の立場もこの承譜に属する。なぜなら、本稿の〈欲望〉論の立場からすると、「生産」を取り上げるにしても、重要なのは自分にとって必要なだけを生産する「必要の生産」(欲求による生産)なのか、あるいは自分にとって必要とされる以上の「必要以上の生産」(欲望による生産)なのか、という区別だからである。そして後者は、商人による流通を前提として初めて意味を持つものだからである。

物理／化学現象と生物現象

上述の事実を直観的に言い表わすならば、〈市場経済〉を「物理／化学現象」に、また〈商人経済〉を「生物的現象」に例えてみればよいだろう。生物現象は、全体として一見、一般の物理／化学現象とは大きく異なっているようにみえる。しかし個別に見ると物理／化学的メカニズムに反しているわけではなく、むしろ生物現象はそれを前提とし、それを逆手にとって「利用し」、その上に成り立っている物理／化学現象への「寄生物」なのである。〈商人経済〉も、これと同様に〈市場経済〉に反することなく、それを前提とし、それを利用して構築される〈寄生物^{パラサイト}〉である。

生物現象として生ずることは、物理／化学現象のすべてではない。むしろ、きわめて限られた、きわめて入念に選択（自然選択）された特別な物理／化学現象だけが生ずるところに、生物現象の特徴がある。もともと物理／化学的には「何が起ってもよい」のであるが、生命においては「特別なことだけが起こる」。両者の論理の違いは、機構そのものの違いというより、この選択的発現性にある。

ところで、この「選択的発現」のような現象が起こるのは、系が開放系になっている時に限られる。閉鎖系では、述べたように、特定の結末だけが生じ、系の作動に選択の余地がないからである。つまり生命は、系が非平衡になっている場合に限られるのである。そして非平衡の系は一般に、物理／化学系においてすら、閉鎖系のような決定論的な予測ができず、多様な振舞いを生じることが知られている。カオス科学や複雑系の科学が明らかにしたのは、まさにこのことであった。生物現象は、このような物理／化学系の「多様な振舞い」を逆手に取り、それを選択的に利用しているのである。

このアナロジーでいえば、資本主義もまた、市場機構の上に立脚するものの、その作動機構は閉鎖系の均衡化メカニズムではないはずなのである。資本主義において、〈経済〉と〈経営〉とが別個の現象として存立しうる根拠もまたここにある。商品関係は、本来「どうつながってもよい」、自由な関係である。それを、「このつながり」へと特定化するのが〈経営〉の働きなのだ。この意味

で〈経営〉という現象は完全に情報論的カテゴリーに特有の現象である。

IV 古典思考の終焉

予定調和の終焉と神の死

中世～近代の西洋思想には、この世界における「神の存在」を何とか証明しようとする作業に大きな意義を置く伝統があった——我々東洋人には馬鹿げたことなのだが。ダーウィニズムに反対する神学者たちが神の存在証明に躍起になったのも、その一端の現れであるし、また現代物理の旗手というべきアインシュタインさえもが、量子記述の確率性に対し「神はサイコロを振らない」と述べたのも、この思想の流れに属しているといえよう（ちなみに物理学において、アインシュタインの相対性理論は、量子力学と対比的に古典力学の一種として扱われている）。物理学の歴史は、近代どころか最近に至るまで唯一神に奉納さるべき教義を探求する歴史であったのである。してみると、19世紀までの古典物理学に範をとって「見えざる手」を証明しようとした一般均衡理論も、所詮、この「古典」大河の支流でしかなかった。

だが今日、カオス科学や複雑系理論の知見に従えば、もはや物理／化学においてすら、決定論的な「見えざる手」を信奉することはできない。世界は、超越者の摂理に盲目的に従うものではなく、系がみずから決めていく予測不能な固有の歴史にほかならないのであり、そもそも、固定的な「最適解」なるものが存在しないのである。つまり最適化計算など、どこでも行われてはいない。生命の進化にしても、進化の先を安定均衡の収束点として予測することはできない。経済システムもその例外ではない。神は最終的に死んだのである。

西洋思想において（ニーチェによる神の死亡宣告を受け）、予定調和の「神」を脱し、ようやくすべてを人間の準位で考えようとしたサルトルは、次のように言い放った：「かりに神が存在するにしたところで、別にどうということはない⁸⁾」と。これは神の「否定」ですらない。「無視」である。神に対する、考える限りの最高の冒瀆といえるだろう。筆者はサルトルの全面的な主体性信

奉を支持するものではないが、神に関するこの点に限れば同感である。これに倣って言うなら、欲望の高まった資本主義のもとで、欲望の後ろ盾を得た商人たちはこう言い放つであろう：「**かりに均衡が存在するにしたところで、別にどうということはない**」と。均衡とは、系を環境から恣意的に切り離して閉鎖系とみなした場合にのみ観察される、便宜的な、みかけの存在である。現実の社会－経済システムは、もともとそのような閉鎖系ではないのだから。

(続)

8) J-P.サルトル『実存主義とは何か』人文書院、1996年（新装版）、p.81.